

ねつとわあく

ネットワーキング

今、情報誌がおもしろい――



「ネットワーキング」さまざまな市民運動がそれぞれの独自性を尊重しつつつ網の目（ネットワーク）のように連携していくこと――。

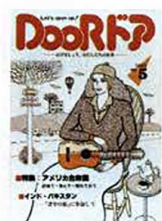
県婦人課で発行している本誌「ねつとわあく」も女性たちが手をつないで連帯の輪を広げていこうとの思いが込められての命名である。昭和五十七年の創刊から毎年公募の五人の女性編集員の協力を得ての行政の情報誌作りは他県でもあまり例を見ず、日本全国四七都道府県の中でもユニークな存在と言える。（ちなみに全都道府県で婦人情報誌を出している数は四三）。

世の中、三化時代と言われ、高齢化・国際化・情報化とこの三つの「化」に如何に対応するかで、生き方が違ってくると言われる。情報に関して言えば、私達をとりまくくおびた

だしい数の情報の中から、自分にとって本当に必要な情報を取捨選択する能力が必要になってくるし、又、本当に自分の欲しい情報を手に入れる手だても必要になってくる。例えば情報を得るための情報。手はじめに、静岡県下で女性のための情報誌がどれ位出ているのか、各市町村、新聞に協力をお願いして調査を行った。実施にあたっての選定基準は、

- 一、女性だけで作る。又は、女性の為に作られた情報誌であること。
- 一、発行主体は公的機関・民間を問わない。
- 一、有料・無料を問わない。
- 一、定期或いは不定期でも継続して発行されているもの。

集まった情報の大きな流れの一つは、「誌」ではなく「紙」であるが、各地域で活躍している



グローバル文化交流協会
ドアドア編集室
年二回発行 一五〇円
△五五〇八七一―四七四

県東部振興センター
コットンクラブ
創刊 五〇〇円
△五五九〇二〇―二〇〇四



草の指輪編集部
代表 平井和子
創刊 四百円
△五〇七二一六七二八

女性談話室しずおか
代表 寺田朝子
年二回発行 三八〇円
△五五三三四五―五二二八



静岡地域婦人団体連絡会
年二回発行 一五〇円
△五五三三二一〇六一



婦人会・団体・グループの機関紙（会報）である。県下三二市町村から届いた会報からは、それぞれの活動の中味の濃さや、それに携わる人々の熱い思いが伝わってくる。又、それを年間まとめた冊子も出されている。

次なる流れは、不特定多数の読者を対象に発信するヒト・モノ・生き方・文化の総合情報誌とでも分類しようか。本誌はこれに類する。新しきは六三年一月創刊の「草の指輪」、古きは「婦人静岡」（昭和二十四年創刊）がある。これらは下段に紹介したように、外観も内容もバラエティに富んでいる。最近多く目につくのがヒトの情報、女性も多様な生き方を選択できる時代にあつて、しなやかに、たく

こんな情報もあるよ

その一

忙しい人、まとめて情報のほしい人むけに、新聞記事の切り抜きを集めた「切り抜き情報誌」がナント、静岡県にもあります。

磐田市社会教育課の「婦人教育情報クリップ」月一回発行で紙の裏表ビッシリと情報がつまっている感激。

清水市には民間の銀行で出している「シミズ マンスリーレポート」があります。女性

性の為だけの情報ではなく清水の事ならずすべて集合！（女性の担当者が一人で頑張って作っているそうです）



こんな情報もあるよ

その二

情報は受けるだけでなく、発信するのも又楽しい。子育て、家庭生活、生きがい等々、ふだんに言えない悩みや思いを、回覧ノートに書き、広く交友の輪を広げている人達もいる。県内に五十人の会員を持つ「ポプリの会」、年代層や家庭の内容によって現在五つのグループが郵送によってノート交換。毎月出されている会報には各種情報も満載。外に出る機会の少ない主婦にとってはこの様な方法もある。

（問合せ先 〇五三〇五三一三五八〇ポプリの会）

ましく、個性豊かに生きる女性の情報は一歩ふみ出そうと思っている人を励ましてくれる。しかし、これからは、より具体的な情報、プログラムの情報が求められてくるであろう。多様な選択を示すだけでなく、選択した場合の具体的な方法論、例えばボランティア活動により社会参加を始めてみようと思った人が、踏み出すためには、まずどこに行ったら相談できるか、といった情報も同時に提供していく必要がある。

ものを創るという事はとてもエネルギーのあることであり、それを継続するのはさらに大変なことである。が、県内で多くの女性が情報の発信基地になっている事がとても心強く頼もしい。これらの情報誌が人と人のねつとわあくをさらに広げ、深めていけるよう連携していきたいものである。

★ スタジオゆに亭

代表 伊佐治和子
年四回発行 二五〇円
〇五三〇三七七―六七二二



◆ 浜松婦人懇話会

代表 天野敏子
年一回発行 無料
〇五三〇五六―三二八七



◆ 磐田市教育委員会
社会教育課
年二回発行 無料
〇五三〇六三―五一四三二二五



◆ KKソナテイエイト
代表 佐藤和子
年六回発行
〇五三〇五四―一二六六一

※各種グループ等で発行している冊子で、素晴らしいものがたくさんあります。紙面の都合で紹介できずごめんなさい。

建て前と本音

男のこけんにかかわるからと、夫に会社の人ってきた時は「亭主関白」きどりさせてくれと頼まれたが、実際は「かかあ天下」の家が多いのでは……

(30代 主婦)

時の流れのままに

人をたてるという意味ではないことだと思えます。私たちはそういう教育をさせられてきましたから。でもね、長いことたつと、私

の方が図太くなりますから、適当にやっています。

(60代 主婦)

大切な柱だもの……

亭主関白と言っても、今のお若い方はあまり御主人を大切にしない様に見えます。時代と思いますが、私達とは、かなり夫婦関係が違います。まあ、うまくいっていいのかもしれませんが、亭主関白であっていいと思います。家には大切な柱がなくてははいけません。

(60代 主婦)

女の甘え

女性の社会参加は、女性その回りにその為の条件を整備してもらって行くものと思うのは、女性の考えの甘さだと思ふ。

その為の第一段階としては、女性自らが家事も育児もやり、自分で時間を作り、努力してその実績を重ねることが必要であろう。その実績が社会的評価を受けることで状況が変化していくのであって、亭主関白のせいで社会参加ができないのではないと思う。

(40代 男性公務員)

亭主関白に

あこがれます

亭主関白に賛成か反対かと言われると、正直言って困ってしまう。なぜなら、私は亭主関白のタイプの男性にそこがれているから。

男はやっぱ強くなきゃ。(20代 結婚を夢みる女性)

亭主関白の

方がラク?

亭主関白が好ましいかどうか、結婚してない私は今まであまり考えたことはないけれど、確かに人に考

えてもらって、人の言う通りにするのは、自分で考えたり、判断するより楽だし、責任もないから好ましい。と考える人が多いのもわかるような気がする。でも、これから自分の意見を持った女の人はふえると思う。亭主関白を通せる男の人が減るんじゃないかと、そういう男の人達の事を心配してしまふなあ。

(20代 未婚女性)

いばらないで

亭主関白なんて問題外。妻の力添えなくしては、一日だってやっていけないのに、お金を稼ぐからといって威張るなんて、人間として価値判断が間違っている。妻の人權を認めない夫となんて、一緒に暮らしていけないわ。

(40代女性 会社員)

スクランブル

拝借いたします……



クーマン

……ちょっとお耳を



好ましい?

亭主関白が

今、男女の平等が盛んに言われているのに、或る調査によると、静岡の主婦の約六割は自分の夫のタイプが「亭主関白だと思ってる」そうだ。さらにそれを「好ましいと考えている」主婦が五割もいるとか。私はびつくりしてしまった。家庭を支えているのは自分で、妻や子は常に従うものと思ひ、家庭で何かあれば、すぐ妻のせいにする夫。妻が外に出ていくことも喜ばない……。夫婦は主と従ではなく、対等なはず。「亭主関白」の夫と、それを支持する女性がいる限り、世の中なかなか変っていきそうにないなあ!

(理想を失いたくない三十代)

コバツツツツツ

子供の教育を考えると、両親がそろってうるさくしつけるのは、決してよくないと思う。いつもガミガミ言う母親と、たまにピシッと決める亭主関白的父親がいることが、子供にとって一番好ましい。

(30代 男性会社員)

男尊女卑の名残り

亭主関白は、日本に古くからある男尊女卑の名残りではないでしょうか? 夫婦は互いにゆずり合い又尊敬し合い、時には意見を戦

(50代男性 会社員)

わし、生活をしていくべきだと思います。しかし、現状では、まだ社会の中で女性だからというような差別があるのは残念な事です。

(40代男性 自営業)

見栄っぱり

静岡のひとが「亭主関白」を好ましい、などと言うのは見栄っ張りだからだと思う。そうしておけば、自分の気の強そうところがかくせるから。実際は奥さんの方がずつとしっかりしている。夫が仕事をめいっばいして、家庭の心配もしていたら、早死にするよ。

(50代男性 会社員)



我が家の

ライフスタイル

結婚歴三年、息子が一人のごく平凡な家庭を持っています。「亭主関白」という言葉の存在は知っていたけど、日常意識をしたことはありません。「かかあ天下」も

(20代 主婦)

ちよつと

からかう気持ち

今の若い夫婦では、「うち亭主関白なのよ。」と言いながら、結構妻の方がいろいろな決定権を持っていて強い場合が多いように思う。若い人が「亭主関白」という言葉を使う時、夫をおだてるような気持ちがあるんじゃないでしょうか。

(20代 主婦)

男のロマン

女のロマン

二人の人間が一緒に暮らすのだから、どこかで折り合わなければならぬ。相手の嫌うことはやらないように心がけてきたら、いつの間にか時代遅れの専業主婦。もつと火花を散らして戦ってみた方がよかつたのか、と思ってみるが、しかしうちは亭主関白というのもちよつと違って、これは男の「ロマン」なのだ。ロマンに付き合おうときめた。これは女の「ロマン」。我が家はリッパな関白亭主。

(20代 共働きの女性)

今、はやりの異業種交流? イイエ、女たちのねつとわあきんぐを強めるために、男も女も理解しあうために、あえて本音のぶつけあい。サンセイ・ハンターイイ意見およせください。

わかり合つてほしい。